



主体的に文学の表現を評価する小学校国語科学習： 物語の創作活動を通して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-09-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 昌平 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000299

主体的に文学の表現を評価する小学校国語科学習

—物語の創作活動を通して—

吉田 昌平

キーワード 創作活動 評価 文学 表現の工夫

1 問題の所在

PISA は読解力を自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発展させ、社会に参加するために、テキストを理解し、利用し、評価し、熟考し、これに取り組むことと定義している。文部科学省による PISA2018 の読解力の調査結果の分析(新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ(第5回))によれば、評価し、熟考する能力について課題があることが明らかになった。文学的文章の学習において、評価し熟考する能力を高める方法の一つに推薦文や解説文を書くという言語活動が挙げられる。しかしながら、これらの活動については学力が低位の児童にとっては難しい活動であり、主体的な学びを実現するという点において課題もある。では、児童が主体的に文学的文章を評価し、熟考する言語活動はないのだろうか。文学的文章を読み進めるための言語活動として物語の創作活動が挙げられる。物語の創作活動は、物語の表現の工夫や効果等を捉える上で有効な活動であることはこれまでに指摘されている。香西(1990)は自分の文章を工夫しようとする者だけが、他人の文章の工夫を見ることができると述べている。また、河野(2010)は、表現に込めた作者の工夫に気付かせるために、学習者を作者にし、表現を工夫することを必然の課題にするべきであり、物語の創作活動はそのような場づくりに最も効果的であるとしている。また、物語の創作活動は、児童にとってやってみたいという期待感を持ちやすく、主体的に取り組める活動であるといえる。一方で、三藤(2014)による調査では、多くの指導者は物語の創作に有用感を感じつつも、その指導方法については悩みを抱えていることが明らかになった。

そこで、本研究では、物語の創作活動に着目し、児童が主体的に文学的文章を評価し、熟考するために、物語の創作活動を言語活動としていかに位置付ければよいかを明らかにすることを目的とする。

2 創作活動の開発と教材化

(1) 三つの物語の創作活動の設定

本研究では、物語の創作活動を次の三つに整理する。一つ目は、文学的文章の展開や構成の巧みさなどを生かして創作するリライト話である。同じ展開で搜索するので児童にとっても取り組みやすいと考えられる。二つ目は、文学的文章の途中で「もし登場人物が別の行動をしたらどうなっていたら」と仮定して新たな話を創作する挿入話である。三つ目は、「もし続きがあるとしたらどうなるだろう」と仮定して新たな話を創作する続き話である。仮定して創作するにはどのような話でもよいわけではなく登場人物の性格や表現方法、主題等と照合して妥当な話であることが求められるため、それらに着目しながら文学的文章を読み進めることが期待される。

	創作	内容	読解の着目点
実践1	リライト話	文学的文章の展開の工夫を転移して創作する	展開や構成の巧みさ
実践2	挿入話	文学的文章の途中における登場人物の行動を別の行動をすると仮定して創作する	登場人物の性格やその文章特有の表現方法

	続き話	文学的文章に続きがあると仮定して創作する	登場人物の変容、主題
--	-----	----------------------	------------

(2) 教材化の視点

本研究では、子供が創作物語を作りたいという意欲を持って文学的文章を読み、作品とかがかわる中で作り出した自分の考えをもとに物語の創作活動を通して、表現方法や物語の展開の工夫などをとらえ、その工夫のよさを味わうことをねらう。従って、教材には、子供が読む目的を見出せる要素、学習内容、子供の学びを生かせる要素が必要である。そこで、以下の三点から教材を選定する。

目的性: 子供がその作品をもとに創作物語を書きたいと思えるものか。

価値性: 読み手の感想や感動を得る作品特有の叙述や構成の美しさ、巧みさがあるか。

創作性: 解釈した表現の工夫を生かした、リライト話や挿入話、続き話を創作することができるか。

上記の視点から、以下のように第5学年の二つの文学的文章を教材として取り扱うこととした。

	世界で一番やかましい音	注文の多い料理店
目的性	村人が王子様に協力して大声を出そうとするも誰も大声を出さないこと、それにも関わらず王子様が喜ぶという、読み手の予測する展開と異なる意外性のある展開に面白さを感じやすい。自分も同じように面白い物語を作りたいと創作への意欲を高めやすい。	山猫軒での戸は表と裏に注文が書かれているが、7枚目の裏に何が書かれているかは書かれていない。また、山猫軒での恐ろしい体験があったにも関わらず紳士の態度が変わっていない。よって「7枚目の裏は何と書かれていたのだろうか」「この後紳士はどうなるだろう」と挿入話と続き話の創作への意欲を高めやすい。
価値性	題名も含めて読み手の予測に反する意外性のある展開になっており、展開や構成の巧みさがある。	戸の表裏に書かれた注文から注文を書いた山猫軒の意図が読み取れる。また、紳士の見た目だけが変容したという構成から、作品の主題を考えることができる。
創作性	山場までに読み手の予測に反する展開が二度仕組まれている。それが設定と結末との変容に繋がっており、その展開を生かしたリライト話の創作ができる。	山猫軒での色の効果や注文の規則性と言う表現の工夫が、7枚目の戸の裏の注文を書く挿入話を、構成の工夫からつかんだ作品の主題から、続き話を書くことができる。

3 授業の実際

(1) 実践1「世界でいちばんやかましい音」

①単元計画

第1次 教材文と出会い、学習課題について話し合う。(1時間)

第2次 教材文の面白さの要因について話し合う。(4時間)

第3次 読み取ったことをもとに、物語を創作する(2時間)

創作した物語を読み合い、学習の振り返りをする。(1時間)

②授業の実際

第1次では、題名読み、全体読みをした後に初読の感想を話し合った。子供達は下記のように中心人物のギャオギャオ王子の変化や登場人物の人物設定に着目して、作品の面白さを感じ取っていた。そこで、「このようなおもしろい物語を自分でも書いてみませんか」と物語の創作活動を提示した。35名中33名の子供が「ぜひやりたい」2名の子供が「やってみたいけど難しそう」という回答だった。概ね創作活動への意欲を示していたので、「作品が面白く感じる要因をさぐり、創作物語を作ろう」という学習課題を設定した。

ぼくは、この物語は読み手にとって意外な展開がおこるようなしかけがあるところがいいなと思いました。自分で物語を作る時は、同じように意外な展開を考えるのが面白かったし、どんなしかけにしようか少しなやみました。だから、そんなしかけを作った作者はすごいなと思いました。

③実践1の考察

教科書のように面白い展開の物語を作りたいという反応を示していたことから、教科書の展開に沿って物語を作り替えるリライト話を提示したことは、子供が主体的に読み進めようという学びに向かう力を高める上で有効であったと考える。また、教科書と副教材との比較を通して、子供は「王子様のために人々が大声を出そうとしていたのにしなかった」という5場面から6場面の展開の意外性や、「他人の声を聞こうとして大声をだそうとしなかった人々に対して王子様が喜ぶ」という6から8場面の展開の意外性、さらにはその意外性をもたらす要因として6場面の存在を捉えることができた。そして、リライト話では「お姫様のために人々が宝石をつくらうとしていたのにしなかった」という意外性や、「美しい宝石を見ようとして宝石を作らなかつた人々に対してお姫様が喜ぶ」という意外性のある物語を創作することができた。また、世界で一番美しい宝石という題名に対して、物語の結末では人々があるままの石の美しさを自慢するという意外性まで表現することができていた。このことから、リライト話の創作は、教科書の題名も含めて読み手の予測に反する意外性のある展開の巧みさや面白さを捉える上で有効であったと考える。また、子供の振り返りの記述から、読み手の予測に反する意外性のある展開を仕組む作者の凄さを実感していたことがわかる。このことから、リライト話の創作は、物語の展開や構成の巧みさを評価する上で有効であったと考える。

(2) 実践2「注文の多い料理店」

①単元計画

第1次 教材文と出会い、学習課題について話し合う。(1時間)

第2次 教材文の全体構成について話し合う。(1時間)

山猫軒の戸のきまりや色の効果について話し合い、挿入話を創作する。(3時間)

紳士の変容について話し合い、続き話を創作する。(2時間)

第3次 創作した物語を読み合い、学習の振り返りをする。(1時間)

②授業の実際

第1次では、既習「世界で一番やかましい音」の振り返りをした。すると、全員が「また物語を読んで物語をつくりたい」と回答した。つぎに初読の感想を交流した。

・戸に書かれている注文を紳士は本当の意味とは逆にとらえて料理される寸前だったのがおもしろかったです。
・紳士の顔だけが元にもどらないという結末になっているのが意外でした。なんで作者はこんな結末にしたのかなと思いました。

上記のように感想では、山猫軒の戸の表現や結末の表現に着目した感想をもつ子供が多かった。そこで、「もし、このまま紳士が奥に進んでいったらどんな展開になっていただろう」「この物語はどうしてこのような結末にしたのだらう」と問い、「物語をおもしろくする構成や表現の工夫について話し合い、挿入話や続き話を創作しよう」という学習課題を設定した。

第2次では、まず「山猫軒には何枚の戸がありますか」と問い、戸の枚数について話し合った。最初は、13枚と言っていた子供もいたが、戸には表と裏があり、それぞれに注文が書かれていることに気付いていった。そして、7枚目の裏の注文については書かれていないことにも気付いたので、子供達は、戸の表と裏に着目

していった。そこで、まず1枚目の戸だけに着目し、「表では『どなたも』と言っているのに、そうして裏では『太った方や若い方は大歓迎』といっているのだろう」と発問した。子供達は、「太った方や若い人のほうがおいしいから」と発言し、裏に山猫の本音があるのではないかと推測した。そこで他の戸についても比較した。その時の話合いの様子は次の通りであった。

- C1 3枚目の表はどろをおとしてという注文だけど、裏は鉄砲をとってくださいと書かれています。これは、鉄砲があると殺されてしまうという山猫の本音だと思います。
- C2 4枚目も裏の方が本音です。「ことにとがったもの」と書いてあって、とがったものは鉄砲と同じで、けがをするかもしれないからです。
- C3 6枚目の裏には、「もうこれだけです」と書いてあって、「これが最後だから中へ来て」という本音があると思います。
- T 戸の裏に山猫軒の本音が多く書かれていますね。どうして表に本音を書いていないのでしょうか。
- C4 裏に書いた方が、紳士に気付かれにくいから、相手にぎりぎりまで気付かせないために裏に本音を書いたと思います。
- C5 山猫は動物だから、紳士は人間で鉄砲も持っているから、途中で気付かれたら、鉄砲でうたれてしまうからだと思います。
- C6 山猫が紳士を食べるために、紳士に気付かれないように工夫しているんだと思いました。

話合いを通して子供達は、山猫軒は戸の裏に本音を込めているという表現の工夫とその意図を捉えたので、戸の表の表現について着目して工夫された表現がないか話合った。その時の話合いの様子は次の通りであった。

- T 戸の表で山猫軒の表現の工夫はないでしょうか。
- C1 「料理はもうすぐできます」は、紳士にとっては自分が食べる料理で、山猫にとっては紳士を食べるという意味です。
- T 山猫と紳士とでは読み取る意味がちがうということですね。他にもそんな表現はないですか。
- C2 「すぐ食べられます」は、紳士は料理を食べるということで、山猫にとっては紳士が食べられてしまうという意味です。
- C3 「おなかに」というのは、紳士にとってみれば、店の中へということで、山猫にとってみれば、自分のお腹という意味です。

この話合いの後に、7枚目の戸の裏にはどんなことが書かれているかという挿入話を創作した。その時の子供が創作した挿入話の一部は次の通りであった。

二人は泣き出しました。けれどももう後にもどうしたけれどもどれません。2人のしんしはあきらめて戸を開けました。

その中には笑っている山猫軒達がありました。そして、大きなテーブルに赤色のお皿がおいてありました。しんしはなみだを出しながらもかすかに金文字で書いてある最後の言葉を見つけました。

【さあさあおなかにお入りください。決してごえんりょはありません】

2人のしんしはなみだを多く山猫の笑顔はどんどん大きくなっていきました。そして山猫は一人のしんしをひょいと持ち上げて食べようとしてきました。その時です、風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。

この挿入話には、下線のように山猫軒で多用されている色の表現も使っていた。そして、7枚目の戸の裏の注文は「あなたたちが今まで動物をそまつにしたばつです。さあさあおなかにお入り下さい。」というものだった。この子供の振り返りにはその意図として次のように記述していた。

山猫軒は、動物の命を何とも思っていないしんしをこらしめようという思いが本音であると思ったので、このような注文にしました。また、7枚目の表と同じおなかにお入りくださいと表現することで、よりしんしがこわがると思ったからです。

この子供は、山猫軒は動物の命を粗末にしている紳士に罰を与えようとしている存在であることを理解しており、読み取った戸の表現の工夫を生かそうとしていた。また、挿入話を創作した振り返りでは、表現の工夫について記述していた。

何気なく読んでいたけど、学習をすると戸の裏に本音を書いていた、たくさん色が使われていることに気付きました。挿入話をつくってみると、どんな色を使うか、山猫としんしで解釈できる言葉は何かなどたくさんまよって書きました。そんなきまりをつくったり、色を使ったりして読み手に何度も読んでもらえるようにたくさんの工夫があるのがとてもすごいと思いました。

挿入話を創作する際に、色を使う表現や戸の注文の言葉について悩んだことで、色を使った表現や戸の注文の表現の工夫をした作者についてすごいと評価をしていた。

挿入話を創作した後は、続き話の創作を行った。まず、物語の設定と結末に着目し、紳士が変わったところと変わっていないところについて話し合った。子供達は、紳士の外見が変わっており、性格や考え方は変わっていないことを捉えた。そこで、「どうして作者はこのような結末にしたのだろう」と発問した。その時の話し合いの様子は次の通りであった。

- T 作者はどうしてこのような結末にしたのでしょうか。
- C1 「世界で一番やかましい音」は王子様と人々が大きく変わっていました。中心人物があまり変わらないというのは物語ではめずらしいから、作者はこういう終わり方にしたと思います。
- C2 めずらしいからというのだけじゃないと思います。前の学習で物語を作るとき、ぼくもすごく考えたから、作者はやっぱり色々考えたんじゃないかなと思います。
- C3 山猫軒であんなにひどい目に合ったのに、しんしは見た目重視とかごうまんな態度のままです。そんなしんしようになってはいけないうと作者は伝えようとしたのだと思います。
- C4 この結末だとしんしの顔はくしゃくしゃになっているし、性格は最悪だし、外見も内面も最悪になっているから、読み手もこんな人になりたくないなと思います。

子供たちは、既習の経験から、作者は意図があってこのような結末にしたのだろうと推測しながら、結末で紳士の性格や考え方を変えなかった意図について考えていた。その後、結末後の続き話を創作した。以下はその時作成した子供の続き話である。

「お前様、てくしねくしすだぞ」
なせと、見た目のことでケンカをすうとして
いました。
しんしの体には、クリームがぬられておる
ので、その事にもケンカにな、てしまいまし
た。
さして、ヤ、このことで、山鳥を調理した
のてすが、二人では、とても気まずいので、
しんし仲間の人達もよんでい、しんしに食べる
ことにしました。
しんし仲間もヤ、と来て、食べようとす
て、ノ人のしんしが、
「お前らは小さいのでがまんしろ。せ、か
よんであげたらだからな。」
てい、て山鳥の一番小さな部分を分けて食べ
ました。
すると、しんし仲間は、
「もう、帰ります。おなだ達は、もうせ、
たいもうかかおらな」
てい、てスワスワと帰、ていきました。
そうして、二人のしんしは、大事な仲間を
失いました。

この続き話では、二人の紳士が見た目のことで喧嘩をしているという外見を気にしている表現や、「お前らは小さいのでがまんしろ。せっかくよんであげたんだからな。」と傲慢な性格が表現されていた。また、それによって大事な仲間を失うという結末になっており、自分なりに本作品の主題を解釈していたことが分かる。この子供は続き話の創作後の振り返りでは次のように記述していた。

私は学習する前は、どうしてしんしの性格を変えないのだろうと思い、この話の終わり方に反対でした。けれど読み進めると、読み手に見た目重視でごうまんな態度をとってはいけないうというメッセージがこめられていて、今までとちがう終わり方に納得しました。続き話をつくる時には、そんなメッセージが伝わるように考えてつくりました。私は何度も考えて作ったので、作者の宮沢賢治さんはすごいと思っし、読み手に伝えることを物語の終わり方で工夫しているのがいいなと思いました。

③実践2の考察

初読の感想では、戸の表現や物語の終わり方など表現に着目したものが多かった。また、挿入話や続き話への意欲ももつことができていた。これは、実践1でリライト話を創作した経験によって、物語の書き方に着目するようになったからだと考えられる。読み進める過程で、戸の7枚目の裏の注文が書かれていないことから、戸の表裏の注文の表現を比較していった。子供にとって挿入話を創作する上では、戸の表裏の注文の表現の工夫を捉える必然性があるからである。それによって、子供は進んで読み進め、戸の裏に山猫軒の本音が込められている意図や紳士と山猫軒双方で異なる解釈ができる表現があることを捉えることができたと考えられる。挿入話では、紳士をこらしめようという山猫軒の本音を注文に表現して創作していた。次に、物語の設定と結末について比較していった。子供にとって続き話を創作する上では、物語の終わり方の工夫について捉える必然性があるからである。続き話では、紳士の外見を気にする様子や、傲慢な性格が表現されており、そのことで大事な仲間を失うという結末を創作していた。その創作は、物語で自分なりに読み取った作品の主題が伝わるようにと意図して書いていたものだった。挿入話や続き話を通して、いずれも子供からは物語の表現の工夫のよさやその表現をした作者が凄いと評価していた。これは、自分で実際に挿入話や続き話を創作したからだと考えられる。よって、挿入話や続き話の創作活動を位置付けたことは、山猫と紳士の戸に書かれている言葉の解釈のずれや、戸の表と裏の特徴、設定と結末の紳士の変化の仕方など、物語の構成の工夫や表現の工夫を捉え、その効果を評価する上で有効であったと考えられる。

4 成果と課題

本研究で得られた成果は以下の三点である。

第一に、物語の創作活動の種類である。本研究を通して、文学の表現の工夫を評価するためにはリライト話、挿入話、続き話の三つの創作活動が有効であることが明らかになった。また、それらの創作活動を位置付けるためには、文学教材を目的性、価値性、創作性の三つの視点から分析することで、効果的な創作活動を設定することができることが明らかになった。

第二に、物語の創作活動の位置付け方である。物語の創作活動は、①読解のための創作活動を2つの単元で設定する②創作活動の特徴に応じて読みを焦点化する③創作活動後には振り返り活動を位置づける、ということである。本研究では、創作活動を2つの単元で設定することで、より子供が文学の表現の工夫について着目して読む姿が明らかになった。また、子供は、リライト話では文学の展開や構成に着目した読みを、挿入話では文学特有の表現方法や登場人物の性格に着目した読みを、続き話では文学の終わり方に着目した読みを展開していた。このように、創作活動はその特徴に応じて、子供に評価させたい表現の工夫を焦点化することができることが明らかになった。そして、創作活動後に振り返り活動を位置付けることで、なぜそのような物語を創作したかという子供の意図を把握できると同時に、実際に作者として文学と対峙した子供が文学の表現の工夫について評価することができることが明らかになった。

第三に、創作活動に向かう比較活動である。本研究では実践1では教材文と副教材文との比較、実践2では注文が書かれた戸の表と裏との比較と、文学の設定と結末との比較を位置付けた。創作活動において、創作活動をする上で必然のある比較活動を位置付けることで、子供が主体的に文学の表現を評価することが明らかになった。

課題は、創作した物語の評価についてである。本研究では、子供が主体的に文学の表現を評価する手立てとして位置付けていたために創作した物語そのものの評価は行わなかった。今後は、子供がどれだけ読みを深めたかという評価をする上で物語の創作活動をどのように位置付け、またどのように評価するとよいか明らかにしていく必要があると考えられる。

物語の創作活動は、子供にとって楽しい活動であり、国語を苦手とする子供も楽しみながら取り組んでいた。今後は、より一層子供が主体的に文学を読み進める手立てとして、どのような物語の創作活動が有効なのかさらに研究を進めていきたい。

参考・引用文献

河野 智文(2010)「単元学習と文学作品(三)－言語活動によって展開する授業実践を中心に」『文学の授業づくりハンドブック第3巻』藤原顕編 溪水社 pp.182-183

香西 秀信(2010)「総表現社会で何を読むか」『国語科教育学はどうあるべきか』望月善次編 明治図書 p47.

文部科学省(2018) 新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ(第5回)

三藤 恭弘(2015)「物語の創作」学習指導における推論的思考力の育成:「事件一解決」の推論枠組みを用いたストーリーの構築指導を通して 国語科教育 77 巻

(よしだしょうへい／福岡県久山町立山田小学校)